

漁民の願いは有明海の再生

島原の漁民、開門求める

6月16日の諫早干拓公金差止控訴審の第一回口頭弁論において、長崎県島原市の漁船漁業者吉田訓啓さん(43)は、諫早干拓に有明海の環境が激変し漁業ができなくなっていると訴えた。吉田さんによれば、干拓工事着工前の漁獲量を10とすると、潮受堤防を締め切った1997年に7割に減少し、98年に6割、現在は3〜4割に減少していると漁業の現状を語った。また、漁獲高の減少にともない漁協の組合員も半分以下に減少し、漁協が存亡の危機にさらされ、島原市周辺地域の衰退に拍車をかけていると語った。さらに、現在行われている稚魚の放流などは対処療法にすぎず抜本的な解決にならないと指摘し、有明海の再生のためには、開門しないと訴えた。

窮地にある日本の農業

2005年まで農業高校に勤務し現在農業に従事しながら長崎県央農民組合の役員をしている諫早市民の男性は、食糧自給率が39%まで落ち込み

日本の農業が窮地にあることを指摘した。また、諫早市内の農道整備事業費の2倍以上の予算がわずか4戸の諫早湾干拓農地の農業者へ補助金として支出されることに触れ、一般の農民を置き去りにした差別的な県税の支出であると厳しく批判した。さらに、干拓農地での環境保全型農業が名ばかりのものであり、実際には深刻な水質汚染を生み出している現状を明らかにした。



医療・福祉 犠牲に

長崎市の医師は、県民所得が全国最低水準と言われる長崎県において2008年度だけで諫早干拓に95億円もの県費を投入し、そ

流速毎秒2m超でも問題なし

チエックの会ヒアリング

6月12日、公共事業チエック議員の会(鳩山由紀夫幹事長、保坂展人事務局長)の主催で、有明海の再生のための諫早干拓潮受堤防の開門に向けたヒアリングが行われた。

このヒアリングにおいて、2004年に農水省が実施した短期開門調査の際に排水門付近において毎秒2mを超える流速が常態化していたことが明らかとなった。

これまで農水省は、潮受堤防南北両排水門を開けると毎秒1・6mを超える速い流速が生じ排水門の構造及び諫早湾の環境に悪影響を与える等として、開門を拒み続けてきた。

しかし、短期開門調査において流速が毎秒1・6mをはるかに超えていたにも関わらず、何ら問題が生じなかったことが判明し、農水省の開門拒否の理由には合理的根拠がないことがますます明らか

の一方で医療や福祉分野の予算が削減され、官製ワーキングプアともいえる危機的な状況にあることを指摘し、長崎県の姿勢が憲法25条に逆行し地方自治の本旨に反すると厳しく指摘した。

になった。

ヒアリングには、16名の国会議員らが参加し、調整池の水は農業用水として問題ないから調整池に代わる農業用水の代替水源の検討の必要なしと言いつける農水省に対して、調査して資料を提出しないと国会での政治判断ができないとして代替水源の検討を強く迫った。

世界一高いタマネギ

週刊ポスト(6月13日号)「これが役人天国 血税浪費85兆円の全貌だ」の記事の中で、諫早干拓農地で収穫されるタマネギについて世界一高いとの指摘があることが分かった。諫早湾干拓事業費2533億円から換算すると、タマネギ1キロにかかるコストは1万5000円となり、国産最高品質といわれる淡路島産タマネギ(1キロ300円)の50倍となり、農水省は、世界一高いタマネギを国民に食べさせるために、2533億円の税金をつぎ込んだと指摘した。